

私の大学時代

宮 澤 乃里子

「退職によせて」という別の原稿を書いている、自分の学生時代のことを思い出した。大学時代のことを話したり書いたりするチャンスは、めったにないだろうと思うので、思い出すままに書かせていただくことにしようと思う。時代論でも一般論でもなく、あくまでも個人的な話なので、お読みいただくのは申し訳ないし、このような所を書いていいのか迷ったが、卒業記念のわがままとって、お許しいただきたい。昔のことなので、記憶が間違っているかもしれないことをまず、お断わりしておく。

受験戦争

私は、戦後のベビーブームの落とし子。人数の多い団塊世代といわれる世代だ。近くの区立小学校は教室を増やすことが間に合わず、半分の生徒は午後からの2部授業という時代だった。両親はそれを嫌って、国立の附属小学校に私を入学させた。試験だけでなく、くじ引きがあったので、くじ運がよかったといえる。中高で優秀な外部生が入ってきて、落第もある厳しい学校だったが、なんとか高校まで踏みとどまった。

附属は高校までなので、全員が大学受験。ベビーブーム世代の受験競争は、厳しかった。大学への進学率は、今に比べて低かっただろうが、学校推薦や指定校などの方法はなく、一発勝負の受験だけ。“受験地獄”と話題になった。

私は、勉強嫌いだったが、それなりの大学に受からないと、恰好がつかない環境だったので、受験勉強はそれなりに、がんばった。不得意科目は英語、その他は平均的に点数がとれるタイプだったので、科目数の多い大学が有利と思い、国立と私立の女子大に目標を定めた。早稲田に行きたかったが、(某野球選手のファンだったから)私立の文科系は3教科受験で、英語の比重が重くて不利だった。親の希望は、当然、

国立大学。親の熱望する大学を受けるだけ受けることにした。期待していなかったのに、皆、合格してしまい、親の大喜びを裏切れず、結局、合格した私立2校を捨てて、国立のお茶の水女子大学に進学した。当時は、国立が上位と考えられていたし、私立との学費の差が、今よりずっと大きかったから、とれあえず親孝行したことになる。国立大学の授業料は、たしか月額1,000円、入学金は4,000円だったと思う。物価が現在の10分の1としても、とても安かった。

入ってみたら、こうだった

地理的には、大学が出身高校の隣にあったので（関係はまったくないが）、通学路も同じで、たいした感動もなく入学した。校門からまっすぐな並木に向うに古い講堂がある学校らしい佇まいは、地方からきた新入生には、感動を与えたかもしれない。木造の校舎は古く、教室は床が抜けそうで、授業前は、先生の足音といっしょに、廊下のきしむ音がした。

1か月もたたないうちに、女子大を選んだことを後悔した。高校までは、男子に囲まれていたためか、女子だけの雰囲気になじめなかった。同じ学科は20人という少人数。高校までに特に好きな科目がなかったので、新しいことをやってみようと思って選んだ教育学や心理学は、私には向かなかったようだ。

とにかく卒業して早く社会に出てしまおうと思った。ゼミはなく、卒論は、実験結果を含む手書き100枚以上という決まりだったと思う。実験心理学を選んだので、どんな仮説を立て、どんな実験をして結果を出すか、本当に悩んだ。出身高校の先生にお願いして、2クラスに実験をさせてもらい、結果をひたすら計算した。パソコンも計算機もなかったから、何日も紙と鉛筆で計算ばかりしていた。何度も下書きをして、ギリギリに届けた。途中で、指導を受けた記憶はなく、孤独な作業だった。

記憶に残っている授業は少ない。先生が黄ばんだノートを読んでいるだけの授業もあって、興味を持てなかった。ずっと友人に代返を頼んでいた科目もあり（ごめんなさい）、真面目な学生とは言い難かった。それで、教える立場になっても、出欠に對しても甘く、テストもしない教師になってしまった。

教育哲学の周郷先生の話は面白かった。先生は、常にひどく遅刻してきて、出席もとらなかったが、誰も帰らずに先生を待った。ジョーンバエズのレコードを抱えていらした日もあったし、先生の視点には、いつも目から鱗という感じだった。波多野完治先生のピアジェ心理学も最先端だったが、理解するのがむづかしかった。坂元彦太郎先生の授業で、出席したのが一人だけだったことがあり、幼稚園の園長室でお茶を

飲みながら、将来の話をした。放送局の仕事などに話して下さったことが印象に残っている。

語学が苦手な私は、英語にも苦勞したが、フランス語は、単位を落としてしまい、必修なので焦った。もう1年やり直すのは嫌だったし、ドイツ語に替えたところで、結果は同じと思えた。そこで、情報をかき集め（取材能力はあったということか）、必修は「外国語」であり、留学生を考慮して「第2」とは書いていないことを発見。「英文科の専門科目なら、英語でも認める」との確約をとりつけた。英文科の友人に、一番簡単に単位のとれる科目を教えてもらって履修、結局は第2外国語の単位なしで卒業してしまった。その情報を、フランス語を落とした仲間にアナウンスしたことは、勿論のこと。放送局のような役割が好きだったのかもしれない。今考えれば、大学には語学を習得できるチャンスがたくさんあったのに、もったいないことをしたと思う。（学生には、在学中に語学を勉強するようアドバイスしている。）

ちょうど学生運動が吹き荒れていた時代だった。受験するのに、バリケードを越えて行かなければならない大学もあり、どの大学にも政治運動の波が押し寄せていた。東大の安田講堂事件もこの時代のできごとだった。体制に反対することが正しいこと、政治運動に参加することが正しい学生生活と言う風潮があったように思う。アジ演説の内容には納得したが、あの特別の調子が生理的に嫌いで、結局、デモには参加しなかったし、政治的な活動には近づくなかった。

大学には、地方出身の優秀な学生が集まっていた。地方の高校でトップクラスにいた人たちだったのだろう。「合格した時には新聞に載った」という人が何人もいた。真面目な人が多かったように思う。高校で落第ストレスだった私は、成績や点数から解放された気分で、飛び回っていた。似た環境が集まっていた高校までと違い、年令も環境もいろいろだったことは興味深かった。「あなたたち本当に子どもね」と言った年上の同級生は保証人欄に「夫」と書いていて、びっくりした。休みには、地方の友人の家に遊びに行ったり、旅行もした。ダンスパーティーにも、合コンにも行ったり、恋人の話も悩みも話した。ノートを貸してもらったり、宿題をいっしょにやったりもした。クラス遠足というのもあった。いい友達と知りあうことができて、今でも大切に思っている。でも、振り返ってみると、“ちょっとはみ出し”、一人で行動していたことも多かったような気がする。私は、どこに行っても、“ちょっとはみ出し”の存在になってしまう。大学時代から今までずっと、わがままでマイペースの人生だったように思う。

体育会系のスポーツウーマン？

クラブ活動は、いろいろ試してみたが、政治色が強いクラブにはついていけず、結局、高校までやっていたバスケットボール部に入った。学生数の極端に少ない大学で、体育会バスケットボール部も弱かった。私は、背も低いし、強い選手ではなかったが、一応スタメンだったので、試合にも合宿にも参加した。試合や練習の記憶はあまりないが、部で廻して書いていたノートにキャプテン（英文科の1年先輩）が描くイラスト入りの日誌が面白かったことを覚えている。あの先輩はどうしているのか、気になる。

地理的に近かったこともあり、出身中学の女子チームのサブコーチを頼まれた。厳しい男性コーチの補佐役だった。バスケットボールを深く理解できていたわけではないが、人間関係の重要性、教えることの難しさは、よくわかった。人生勉強には大いに役にたったと思う。週2回の部練、遠征試合、年に1度の学習院との総合定期戦など、結構、時間を使っていた。伝統的に先輩に面倒を見てもらい、後輩を指導することが受け継がれていて、現在でもこのクラブの先輩の集まりに、参加している。（RTOクラブという。Rは籠球部の頭文字。古い！）

スポーツは観るのも好きで、バスケットの実業団リーグや関東学生リーグは、代々木第2体育館によく観に行った。入場料が高かったので、バスケットの専門雑誌の会社に押しかけ「スコアがつけられる」と売り込んでバイトに雇ってもらい、「取材」の腕章をつけてマスコミ席で観戦していた。野球も好きで、東京六大学野球は、ほとんどの試合を外野席で観ていた。勿論、入学しなかった早稲田を応援して、優勝パレードにも参加した。

今でも、サッカーのセリエAを観にイタリアへ行ったり、F1を観にベルギーに行ったりする。最近のテレビはつまらないが、スポーツ中継はテレビのコンテンツとして最高のものと思う。

想像力全開

今と一番違っていたのは、コミュニケーションツールだろう。なにしろ携帯電話などないので、個人の繋がり方が、今とぜんぜん違っていた。友人とも、学校で会って、顔を見ての会話だった。人間関係は直接的で単純だったように思う。

男女の交際も、あの頃は、すぐに「電話番号を教えて」とならないわけで、想いを伝える手段が少なかった。1対1になることは、なかなか難しく、「察する」「電話を待つ」というドキドキ感は、今よりドラマチックだったと思う。待つ時間は、想像力をかきたてる。デートだって、親が出てしまうかもしれない電話で約束しなければな

らないし、待ち合わせで、すれ違うこともよくあった。そこにこそドラマは生まれていったと思う。いつも想像力を働かせ、空想の世界を楽しんでいた。

便利さと引き換えに失われた一番大きなものは、想像力ではないだろうか。昔話だって、おばあちゃんが話してくれるのを聞いたら、自分なりの登場人物を想像して創りあげていたはずだ。現在は、細部まで描きこまれて立体感まである映像を与えられてしまう。誰かが創った映像や物語が、押し付けられてしまえば、想像力を働かせる余地がない。子どもにとって、テレビやゲームは想像力を奪うものとも言える。それを考えると、子ども番組を制作していた者としては、複雑な気がする。近頃の事件には、想像力が働かないのが原因ではないかと思えることも多い。

朝の連続テレビ小説で「花子とアン」が好評だったことは、本当によかったと思う。個人的に村岡さんのことを知っていること、アンのご郷に知人がいることもあるが、花子もアンも、いつも想像の翼を広げる喜びを知っている少女で、それが世間に受け入れられたことは、うれしい。今、足りないものがそこにあったからだろう。

アルバイトは社会勉強だった

大学時代、アルバイトもたくさんしていた。一番の収入源は、小学生の家庭教師。たえず週2回は、やっていた。勉強だけでなく、プールにつれていったり、ゲームの審判をしたり、勉強が終わっても遊んであげていて、先生というよりお姉さんのような存在だった。

映画のエキストラ、保険会社の資料作り、写真屋の焼き増し写真の袋詰め、呉服屋の展示会の受付、模擬試験の点数つけ・・・いろいろやったが、今の学生のような接客業（居酒屋や店員）というのは求人がなかったような気がする。

親友からの誘いで、始めた新聞社のアルバイトを結局卒業まで続けることになった。新聞社の企画調査部で実施していた「企業イメージ調査」の仕事だった。はじめは、無作為に選んだ上場企業の社員に面接調査にでかけて行っていた。たくさんの会社の人事部を訪ね、いろんな人に会った。会社には、名前だけではわからないそれぞれの「空気」「色」があるものだ。今でいう会社訪問は、このバイトで経験したようなもの。気に入った会社の人事部には「就職試験はどうなっているか？」とチャッカリ聞いて名刺をもらっていた。

そのうち、調査をお願いする会社を選び、人事部に交渉することや、学生アルバイトを配員する、元締めの仕事をまかされ、デスク業務になった。「いつでも授業がない時に来ていい」とタイムカードを渡され、ほとんど社員のように働いていた。調

査結果をコンピューター用に入力すること、結果を表やグラフにすることなど経験して、調査の裏側を知った。今ならパソコンで一瞬にできることも、結構、時間がかかった。広告コンクルの雑務をやったことは、イベントの裏側を知ることにもなり、楽しかった。広告についての論文集めと分類を頼まれ、広告代理店や図書館に通い、小冊子を作ったこともいい経験だった。自分の仕事が形になって残ることの喜びも知った。

新聞社の社員や広告代理店から出向してきている人たちから、たびたびお茶やランチに誘われ、雑談した内容は、大学の授業より、よほど勉強になった。社会勉強は、この新聞社でさせてもらったと言えそうだ。そのまま、ここに就職できたらいいと思ったが、4年制卒の女子はとらない方針と言われて諦めた。

本気の就職活動

私は、テレビが好きだった。生まれた時からテレビがあったわけではなく、「うちにテレビが来た」という感動的な瞬間は忘れられない。家にテレビが来るより前に、テレビ出演はしていて（教育テレビの音楽の番組）テレビ局の照明器具のぶら下がった部屋を「すごい」と思い、あこがれていた。出演記念にもらった鉛筆は、もったいなくて使えず、今も持っている。

小学生の頃は、10チャンネルでやっていた東映時代劇をよく観た。山城新伍の「風小僧」だとか、歴史上の人物を扱った時代劇が好きだった。日本史は、教科書より、この時間に知ったことが多かったかもしれない。「夢で逢いましょう」や「光子の窓」など、しゃれたバラエティーも好きだった。初代ジャニーズ4人組の歌と踊りにワクワクした。アメリカのホームドラマや西部劇、「私の秘密」などのクイズ番組も興味深かった。好きな番組のある日は、急いで帰ったものだった。テレビと共に育ったという気がする。

大学時代に一番好きだったのは、「これは××です」という子ども番組で、この放送のある木曜日の午前中には、授業をとらないようにしていたくらいだった。物の使い道を教えるという番組なのに、間違った使い方をコントにっていて、藤村俊二やノッポさんなどが出演していた。洗面器で頭を殴るというNHKらしくない番組だったが、テンボがよく魅力的だった。こんな番組を作る人になりたいと思うようになった。（入局した頃には、上部に不評で、つぶされていた）

大学時代、番組のお知らせや天気予報に知っている顔が出て来るようになった。高校のバスケット部の先輩がNHKのアナウンサーになっていたのだった。私は、アナ

ウンサー志望ではなかったが、職場の雰囲気を知りたいと思い、会いに行った。先輩は、女性の職場としては最高だと話してくれた。そしてアナウンサーより制作部署を目指すことを勧められた。

目標が定まったので、本気で就職試験のための準備をした。大学入試よりも、ずっと本気だった。「現代用語の基礎知識」(だったか?) や就職試験問題集、アナウンス読本など、何度も読み返した。苦手な英語もやり直した。漢字の書き取りや難しい読み方などもチェックした。2種類の新聞をとり、隅々まで読み返し、スクラップブックを作って、時事問題をまとめた。小論文の題になりそうなキーワードを拾い出して、決まった字数で書いてみた。アナウンス試験しかない放送局もあったので、アナウンサーとしても潜り込むことも考え、原稿を決まった秒数で読む稽古もした。

当時の就職は厳しかった。女子を受け入れる企業は少ない時代だった。特に放送局は競争率が高いことはわかっていた。就職課の説明会では、「行きたい会社名を具体的に書いてください。ただし、NHKとかそういう不可能なことは書かないように」と言われたくらいだった。東京のテレビ局は、試験が同じ日だったので、1か所しか受けられないし、NHK以外はアナウンサーの募集しかなかった。アナウンサー募集には「容姿端麗」と書いてあったように記憶している。NHKしか考えなかったが、女子の場合、学校推薦が必要で、1校に5枚しか割り当てが来なかった。大学には5学科以上あったので、各学科から推薦者を出して、くじ引きをするということになった。友人たちに「NHKを受けたい」と宣言していたので、皆が降りてくれて、学科代表として、くじ引きに参加できた。年末大売出しのくじ引きと同じ、ガラガラと廻すタイプのハンドルを回すと「当たり!!」が出た。小学校の入学のくじと、学校推薦状のくじがあたったことは、幸運だったと思う。そこでくじ運をすべて使ってしまったらしく、宝くじは、当たったためしがない。

推薦をもらいどこかの大学の大きな階段教室で筆記試験を受けた。各大学から選ばれた大勢の受験者は、優秀そうに見え、私など無理だと悟った。1次試験の発表は、どうせダメだと思ったので、親友について来てもらった。NHKの見学と思えば、ショックもやわらぐと考えたからだ。あれだけの人数の中から、女子の合格者はたった11人だった。なのに、なんと、なんと合格していたのだった。宝くじに当たったような気分だった。

二次試験は、カメラテストやアドリブのフリートークなどもあり、面接があった。面接では、卒業論文のことを聞かれ“同じ場面も違うタイトルをつけて見せると違う見え方をするのではないか”という仮説を実験していると話した。4人くらいの面接官が、

一斉に乗り出してきたように思えた。今、考えると放送局員が興味を持つ題材で、面接は大成功だったのだと思う。卒論は、何を実験したらいいか悩んだ末だったし、就職に有利と考えたことはなかったが、これも運がよかったと言えるかもしれない。

結果を郵便で知らせて来る期限の日まで、心配で生きた心地がしなかった。就職試験は、受からなければ意味がない。1次で落ちたら諦めもつくが、11人にまで残って落とされたら、それは残酷すぎる。苦しかった。郵便ポストをにらんで、数日を過ごした後、期限ギリギリに合格通知が届けられたのだった。女子は、放送4名、アナウンサー2名、管理1名の合計8名が内定した。

あの時の追いつめられていく気持を思い出すと、今、就職試験結果のメールを待っている学生の気持ちが痛いほど、よくわかる。

不便な生活は、手作りで楽しむ

大学にも行っていたし、アルバイトも、バスケットもしていて、忙しかったはずだが、いろんな物を手作りしていた。洋服は、よく自分で縫った。ドレメ式と文化式の両方の原型を作り、本を見て原型から型紙を起し、布を買ってきて断ち、ミシンで縫い、すべて自分で仕上げていた。芯の入ったスーツも自分で縫った。中学の制服だったセーラー服のスカートもチェックの生地と合わせて、スーツに仕立てた。物が豊富にあったわけではないので、何でも活用した。ボタンなど何度も使ったし、残り布も大切にしておいた。工夫することが楽しかった。子どもの頃に、人形の洋服をリボンで作ったり、食堂セットや学校セットを作ったりして、人形ごっこをしていたことの延長線かもしれない。その延長線上に後に演出を担当した工作番組「できるかな」がある気がする。（「できるかな」を担当していた6年間は本当に楽しかった）

バースデーカード作りも楽しかった。高校時代のバスケット部仲間の4人で、誕生日に、他の3人が手作りのカードをプレゼントするということを、何年もやっていた。その頃、カードは売っていなかったので、アメリカのティーン用の雑誌を古本屋で手に入れて、切り抜いたり、綺麗な包み紙をとっておいたり、絵を描き写真を貼り……。凝ったカードを作っては贈り合った。今でも、贈られた手作りカードをそれぞれが、1箱分くらい持っているはずだ。

大学から帰れば、母の手料理が待っていた。台所は母にまかせていて、あまり手伝わなかった気がする。結婚して自分で料理をするようになった時、母に電話をして「あれは、どうするんだっけ？」と時々聞いたこともあったが、困ることはほとんどなかった。母の料理するところを見ていたからかもしれない。料理、裁縫は得意なのに、

整理と掃除がダメ。苦手は、今でも、なかなか克服できない。

大学時代に自宅は立て直しをしたが、その間、仮に住んでいたのは、隣の空き家だった。台所の床は土、水道はなく井戸で、風呂なしの家だった。生まれた頃は、きっとこんな暮らしだったのだろう。その間、母の愚痴を聞かされたことを思い出す。新しい家は、やっとセントラルヒーティングがついた。この家も今はなく、どこかの会社の社宅アパートになっている。

何もわかっていなかった

社会の仕組みや経済のことなど、なにもわかっていなかった。株と言っても野菜の蕪、ボーナスと言っても野菜の茄子を思い浮かべてしまうくらい、無知だった。お金だって、貯金さえしていれば、安心確実に増えるものだと信じていた。将来のために、貯金をすることが、いいことに決まっていると思っていた。

海外での円以外のお金は、ドルくらいしか知らず、為替レートなどまったく理解できなかった。映画をみても、英語だったかフランス語だったか、どこの国の映画だったか、など考えたこともなかった。海外には興味もなく、英語を大切だとも思っていなかった。コンピューターの存在は、バイト先の新聞社で知っていたが、それを個人が持つようになるとは思ってもいなかった。

子どもの頃は何でも話していた親ともあまり話さなくなった。学費は出してもらっていたが、小遣いは、交通費と本代くらいで、あとはアルバイトで、まかなっていた。私鉄と地下鉄と徒歩で、45分くらいの通学時間だったが、家が駅から近くなかったので、遅くなる日は、どこかの公衆電話から電話をすると、父か母が駅まで迎えに来てくれていた。「帰りが遅すぎる」とよく叱られた。居酒屋やカラオケはなかったので、飲んで帰ることはなかったし、そういうことをしたいとも思わなかった。

初めて、友人と泊りがけの旅をしたのも大学時代。学割の国鉄周遊券を買って、東北、四国、九州、北海道などを回った。いろんな人に巡り合い、日本を知った。北海道旅行では、ユースホステルに居候をして、なかなか家に帰らなかったため、両親とうまくいかなくなってしまい、結果的には親離れをした。

時代は移る

物のない時代に育ったから、捨てることに罪悪感があり、物を捨てられない。親は、もっと物のない時代を経験しているから、何でもとっておいていたようだ。親の家を整理してみると、包み紙から紐までキッチンと保管してあって驚いた。

スーパーマーケットもコンビニもなければ、宅配便もなかった。冷凍食品も電子レンジもなかった。買い物は、大切な仕事だったのだ。今や100円ショップやコンビニに行けば、何でも買える時代だし、インターネットで買い物もできる。取っておくことが美徳ではなくなった。現在は、断捨離が流行りで、少ない物で暮らすことが正しい生き方のように言われている。物に対する考え方は、大きく変わった。

コミュニケーションも変わった。P Cの出現と携帯電話の出現は、人間関係を変えてしまい、文化そのものや価値観を変えてしまった。

水道をひねればお湯まで出て、エアコンで、部屋の温度が保たれる。何でもインターネットでわかる。何もかも便利になった。夢のような便利な生活が現実になったのだ。そのことで、失ったものがあるのは、しかたないのかもしれない。便利さは、一度味わったら、後戻りは、できない。「昔はよかった」と簡単に言うことはできない。

私の学生時代は、半世紀近くも昔のこと。ダメな学生ではあったが、明日に希望を持っていたことだけは、間違いない。明日は今日よりよくなると信じていた。若かったのだ。そして、日本も経済発展中の若さがあった。

誰にとっても、時代が変っても、学生時代は、将来の希望に満ちた幸せな時期だと思う。若さは何にも替えがたい特権だから。

時代と立場のまったく違う二度目の大学時代を経験できたことに感謝している。